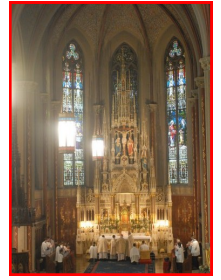




四旬節

2014年 4月



「あなたは塵であり、塵に帰って行くのです。」この言葉は、アダムが罪を犯した後初めて神がアダムに語られたもので、教会がこの日繰り返し語ることで、死が実在するという事実を私たちは思い起こすのです。福音書の中でイエスは、私たちが予期しないときに、死は泥棒のように夜やってくる、と語っています。確かに多くの人々は死ぬことを恐れています。ある人は死んでいる状態を恐れ、ある人は死ぬという行為そのものを恐れます。死の現実と直面すると、人類の技術がどれほど発達していようと、それが無力に思われることもしばしばです。

しかし、死をとりまくこれらすべての状況や感情にかかわらず、いつの日か、私たちひとりひとは例外なく、死の現実と直面することになります。

私たちの生きたいという自然な願望に反して、死は体罰であるかのように私たちにのしかかってきます。そのために私たちは本能的に、死を罪に対する罰と見なしているのです。

罪の起源を考えると、私たちの最初の祖先であるアダムが罪を犯すまで、死の宣告はなされていません。というのも神は死を造られなかったからです。初めに神は、人間を墮落しないものとして創造されました。

しかし、悪魔の嫉妬によって、この世に死が入り込んでしまったのです。死は神からのひとつのしるしとして意味を持ち、私たちに影響を及ぼしています。それは死がこの世に罪があることを明らかにしたということです。

罪と死の関係が見いだされると、私たちの存在の本質の新たな側面が現されました。罪が私たち本来の姿や神のご意志に反する悪であるだけでなく、必ず死へと導くものであるということです

罪を犯したために受ける罰としての死は、それ自体つらく苦しいものです。しかし、死を甘んじて受けられることでも、また何事においても、私たちと同じようにされよとしたイエスは、愛によって、死を受け入れる強さを私たちに与えてくださいました。それでも死は存在します。しかし、自分自身を苦しめるのではなく、良いことをするために自分を奮い立たせるよう、私たちは死についてじっくり考えなければなりません。死について考えるとき、世俗的なもののむなしさや人生の短さも視野に入れなければなりません。「すべてのものは過ぎ去るが、神のみが残る。」この言葉は、ことさら世俗的なものに満足することから私たちを切り離し、神のみを求めよう強く促しています。聖霊の光の中で死について考えることは、神を愛し、神に仕える以外すべてはむなしものであるという理解に導きます。



灰の水曜日の今日、大齋・小齋のおきてが守られなければなりません。小齋の対象は年齢にかかわらず、14歳以上のカトリック教徒で、肉類を食べることを控えるよう求められています。大齋については、満18歳（教会法97条）から満59歳（すなわち、60歳の年の始まりで、60歳の誕生日で完了する年）までのカトリック教徒で、食事の量を通常より減らすよう求められています。このことについて教会は、1回の主要な食事と2回の軽い食事で、2回分の量の和が主要な食事を越えないこと、と定義しています。これは身体的な償いの行為で、特にこの時期に行われるものです。そして、その後すぐに私たちの精神的変化も伴っていなければなりません。「わたしたちの犯した罪をつぐないましょう。」身体的な苦行は、魂のつぐない、謙虚な態度、過ちの認識、良心の痛み、そして生活の改善という結果をもたらします。四旬節初日の灰の水曜日の今日、この思いを黙想しましょう。みことばにこうあります。「主は言われる『今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。』」

みなさん。私たちが回心するために、神が送ってくださる方を受け入れられるよう心の準備をして、この聖なる四旬節を迎えましょう。 アーメン。

ラファエル植田勝行神父の米国での住所

St. Francis de Sales Oratory

2653 Ohio Avenue

Saint Louis, Missouri 63118

王たる宣教会のホームページ<<http://icrsp-jp.org>>

Email: sfds@institute-christ-king.org